12 December 2025

［月刊］キリスト教書評誌

本のひろば

HON-NO-HIROBA

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2025年12月1日発行（毎月一回1日発行）第816号

出会い・本・人

父の書棚から　荒井　仁

エッセイ

第一九回東北アジア・キリスト者文学会議に参加して　芹川哲世

特集 シリーズこの三冊！

思い込みを見直していくためのこの三冊！　小林えみ

本・批評と紹介

C・A・エバハルト 著／河野克也 訳　イエスの死の意味　淺野淳博

日本カルヴァン学会 編　カルヴァン研究 第2号　宍戸基男

宮田光雄 著　ボンヘッファーに出会う旅　小海　基

日本基督教団伊東教会 編　聖徒たちの群像　上　山口陽一

全国同信伝道会 編　天上の友 第五編　山北宣久

A・カイパー 著／日本カルヴィニスト協会 訳　カルヴィニズム　岩田三枝子

湊　晶子 著　あしたは必ず来る　遠藤勝信

桜井健吾 著　近代世界と宗教　猪木武徳

小井沼眞樹子 著　ただそこに居なさい！　大澤秀夫

ジョン・T・マクニール 著／高内義宣 訳　カルヴィニズムの歴史と特徴　吉田　隆

日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL03-3204-0422 FAX03-3204-0457
e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp ホームページ https://bp-uccj.jp《価格10%税込》

増補改訂 キリスト教入門

歴史・人物・文学

嶺重 淑

2025年11月14日刊行予定

世界と日本のキリスト教史、歴史に大きなインパクトを与えたキリスト者の評伝、ドストエフスキーから三浦綾子・遠藤周作まで不朽のキリスト教文学を、各項目見開き2ページで簡潔に解説。第Ⅲ部「文学」を旧版の10作品から15作品に増補し、全体の文章も改訂。

◆A5判 並製・112頁・定価1,540円

こどもに語ろう 聖書のおはなし160

久世そらち 編

2025年11月25日刊行予定

CSやキリスト教幼稚園・保育園でよく取り上げられる聖書箇所160を選び、幼児に向けたおはなしを収録。キリスト教保育現場で幼児に聖書のおはなしをするすべての方におすすめ。索引も充実しており、テーマからふさわしい聖書箇所を探すこともできる。

◆B5判 並製・96頁・定価2,200円

絵本重版のご案内

大好評のクリスマス絵本、重版出来！

クリスマスものがたり

パメラ・ドルトン 絵　藤本朝巳 文

生命力にあふれる鮮やかな色彩の切り絵を用いた、聖書を忠実に再現する降誕物語。

◆260×260mm・上製・32頁・定価1,650円

出会い　本　人

父の書棚から

荒井　仁

1991年に私がアメリカ留学をする直前、父の書棚に金達寿が著した「日本の中の朝鮮文化」という一冊を見つけた。父は長年中学高校の地理の教師であったが、大学生時代は歴史が主専攻だったので、関心があったのかもしれない。私は自分にとって日本とは何かを見つめてみたいと思ったので、借りていくことにしてアメリカで少しずつ読み進めた。

本を開いて衝撃だったのは、日本の地名には朝鮮文化と結びつくものが多いことであった。また人の名前でも知らなければ朝鮮との関係に気付かないまま過ごしてしまうことがあるのに目を開かせてくれた。姓は通名で名は日本名とも朝鮮名ともとれる名前は、高校時代の同級生にいたことを思い出した。

この本によって自分が暮らす日本には朝鮮文化が流れ込み、それが今の日本を作っていることを意識するようになった。半島から渡ってきた人たちがいたという歴史は現代日本の大前提である。しかし日本の中では韓国・朝鮮の出身者が差別をされるという問題が21世紀の今日も起きている。これは日本の歴史的土台を否定しているような気がしてならない。

私が小学生のころ、両親が一枚の葉書をめぐって言い争いをしていた。「あなたが署名をしたから、こんな葉書が来たんでしょ」と母が言うと、父は落ち着いて言葉を返していた。後で分かったがこのやり取りは「日立就職差別事件」に関するものだった。韓国・朝鮮人差別に反対する父は、署名活動に関わっていたのだ。その父が育ったのは、被差別部落ではないが、近隣では侮蔑の対象となった地域である。今では住宅が立ち並んで、侮蔑の言葉は過去にのみ響く。

偏見にとらわれずに日本を見つめ直すことは、日本の豊かさに気付く道である。それは自分にもつながっている。私の苗字は「新倉」のはずだった。「くら」は朝鮮半島につながるとか。

（あらい・じん＝紅葉坂教会牧師）

第一九回東北アジア・キリスト者文学会議に参加して

芹川哲世

二〇二五年八月七日から十日まで、大阪の大阪市立青少年センターにおいて開催された第一九回東北アジア・キリスト者文学会議（実質は日韓キリスト者文学会議）に出席する機会を得た。本会議の創始は一九八七年に遡る。

この集まりの趣旨と目的は、キリスト教徒として文学に関係する人々の活動を通して、「神の国」がこの地に到来するのに寄与することにある。韓国側の集まりの会則には「文学を通して東北亜地域のキリスト教文化を育てキリスト教文人の絆を増進させ福音の伝播と平和共存を追求すること」をその「目的」として明らかにしている。日本の東京水道橋の韓国ＹＭＣＡで開催された第一回会議の主題は、著名なカトリック作家・遠藤周作の作品で、韓国でも複数翻訳のある『沈黙』であった。遠藤氏本人も参席し注目を集めた。それに先立って日本の戦争責任について、謝罪問題をめぐって日韓代表団間の少なからぬ葛藤もあったが、日本代表団の謝罪発言により会議が続行された。

大体、該当年度の八月初め三泊四日の日程で二年に一度開催される会議は、両国の実行委員会が協議して、研究・発表対象を定め、両国のキリスト教文人の作品やキリスト教関連作品を対象としている。主催国で選んだ一名が基調講演をし、日韓両国の詩人と小説家の作品一編ずつ（詩は三篇）を選び、両国で一名ずつ同一作品を対象に分科発表を行っている。発表後は両国の参加者全員による相互討論の場が繰り広げられ、活発な意見が行き来するなど互いの間によい文学的・言語的研鑽と信仰的出会いの場になっている。

本年初日、日本側一七名、韓国側一二名の参加者は夕方から始まったレセプションでは日本側代表・柴崎聰氏によ

る挨拶と韓国代表・梁汪容氏による答辞で幕を開けた。合わせて第一三回アジア・キリスト教文学賞授賞式が行われ、日本文学者の奥野政元活水女子大学名誉教授が受賞した。一九九七年からは両国のキリスト教文学の育成と文学交流に寄与した人を顕彰するための「アジア・キリスト教文学賞」制度を新設し、隔年の会議のたびに相手国の実行委員会で主催国が選んだ授賞対象者に賞牌または賞状と所定の賞金が授与される伝統を受け継いでいる。過去の受賞者の中には私の好きな韓国文壇の代表的な児童文学者・権正生（一九三七―二〇〇九年、二〇〇三年第四回受賞者）がいるのは特にうれしい。

初日の嶺重淑氏の基調講演「文学としての聖書――イエスの譬えの逆説的特質とその衝撃」では「ブドウ園の労働者の譬え」「サマリア人の譬え」「放蕩息子の譬え」「不正な管理人の譬え」が取り上げられ、イエスの譬えの最大の文学的特質として、それがしばしば逆説的特質をもち、それによって読者に衝撃を与え、新しい理解やものの見方を示し、新しい世界へ導いている点に認められ、聖書は極めて強い文学的特質をもった書物であることが強調された。三浦綾子の『細川ガラシャ夫人』について宋定宇氏と長濱拓磨氏、韓国の詩、金京洙「冬の祈り」、李郷莪「あなたのお陰です」と金汐「流れる星のサーカス」について釘宮明美氏、梁汪容氏、南錦熙氏、孫晋殷氏、日本の詩、大鹿理恵「さまよう影　待ち続ける光」、東延江「ユダ」、岡野絵里子「回帰」について閔泳珍氏、李相玉氏、金汐氏、時澤博氏、韓国小説崔仁勲の「ラウル伝」について芹川哲世、金鐘會氏がそれぞれ発題を行い、参加者の間で熱い議論が交わされた。『細川ガラシャ夫人』について評者たちは、作者が自らの良心と信仰のために尊厳をもって死ぬことの意味を再定義し、「命よりも大切な信仰」を守るために文学通り命をかけた殉教者に匹敵する信仰者の姿を描いたところにこの作品の主題を見た。バテレン追放令が豊臣秀吉により布告された時、ガラシャは忠興との離婚に固執し夫から逃げて九州へ赴く決意をしていたが、これが実行されていたら日本にいるキリスト教徒は壊滅したに違いないと確信していたイエズス会士オルガンティーノがガラシャの説得のためにどれだけ苦労したか、このようにガラシャはイエズス会士の日本での存続にかかわる非常に重要

な人物であったことがこの小説には記されていないことは筆者としては残念なことに思われた。

崔仁勲『ラウル伝』はパウロと同時代のラウルという人物（幼友達の教法師）を設定して人間の理性と神の摂理の行き違いというキリスト教的主題を展開させた。パウロの陶器師の比喩のように神義論的立場に順応できずに、個人の意志とは関係のない歴史の動きを当時作者が経験した朝鮮戦争以後から四・一九学生革命に至る韓国の歴史的・政治的現実の中で、挫折と苦悩を繰り返すしかなかった、当代知識人の絶望感をラウルを通して一種のアレゴリーとして描いたものである。

金京洙詩人と金汐詩人の中に登場する一千万人と言われた朝鮮戦争による離散家族の失郷民意識は強く胸に迫った。一時行われていた再会事業も現在は北朝鮮の国家閉鎖により完全に中断している。現在もまだ北に大勢残されている家族との再会事業の再開を強く望む。

三日目午後の文化体験見学では高山右近、細川ガラシャ夫人所縁の地を尋ねた。大阪市中央区玉造にある大阪カテドラル聖マリア大聖堂カトリック玉造教会である。この地はかつて細川越中守の屋敷跡と伝えられる。大聖堂北西には「越中井」が残されており、キリスト教に改宗した細川ガラシャ夫人の辞世句碑が建っている。一八九四年この玉造の地にフランス人宣教師により玉造教会が誕生し、戦災により焼失するも、その後一九四九年に建設された聖フランシスコ・ザビエル聖堂に引き継がれ、一九六三年に現在の聖堂へと生まれ変わった。鉄骨鉄筋コンクリート造、建坪二四五〇平方メートル、軒高二〇メートル、青銅板葺きの大伽藍である。大聖堂は多くの芸術家の作品を有している。大聖堂前の広場の両端にある高山右近と細川ガラシャ夫人の石像、玄関正面の「無原罪の聖母像」、聖堂内の正面の大壁画「栄光の聖母マリア」、左右の壁画「ルソン行途上の高山右近」、「最后の日のガラシャ夫人」、大聖堂内にある大十字架、大聖堂の壁面に揚げられている十字架の道行の一四場面、小聖堂の聖アグネスと聖フランシスコ・ザビエルの像、また大小一〇〇個のステンドグラス窓には、イエス・キリストの生誕と洗礼、聖母マリアの生涯、そして小聖堂には日本人に福音を伝える聖フランシスコ・ザビエルが描き出されていて、いずれも一見の価値があり、大

日韓の参加者たちと（大阪市立青少年センター）

聖堂のパイプオルガンは、二四〇〇本のパイプを有する立派なものである。当日は別室で日本二十六聖人画（バチカン美術館所蔵）により著名な画家・岡山聖虚の聖人画の展示もされていた。

最後に、この会議の中心は何よりも、作家の作品をめぐる討論にある、毎回熱い議論がなされ、いつも時間オーバーになった。通訳者が間に入るにもかかわらず、全くそれが気にならないほどである。日韓にはまだまだ未紹介の優れたキリスト教関連文学作品は多い。若い研究者の参加を強く望みたい。今回実行委員会代表の柴崎聰氏、会計担当の市川真紀氏、宋定宇氏、司会進行と通訳を務めて下さった権宅明（クォンテンミョン）氏、権（クォン）ヨセフ氏、長濱拓磨氏をはじめ関係諸氏に深く感謝申し上げる。

（せりかわ・てつよ＝二松学舎大学名誉教授）

▼シリーズ　この三冊！

思い込みを見直していくためのこの三冊！

小林えみ（こばやし・えみ：よはく舎・マルジナリア書店代表）

『科学を否定する人たち――なぜ否定するのか？我々はいかに向き合うべきか』

私たちの信仰においては、古い記録やテキストが典拠として用いられており、その中には現代の科学としては非合理的であったり、立証しえない記述も含まれています。それを信仰の糧とすることは私たちにとって必要なことであり、また社会や世界において、侵されるべきものではありません。しかし、現実の、この現代社会において私たちが生きていく上では、ある種の折り合いをつけていくことや心・信仰と現実への適応を使い分けることが必要となってきます。

科学が発展したことによって、私たちの生活は格段に健やかで平和なものになりました。たとえば、昔であれば、原因がわからず治療が不可能で死を待つしかなかった病気が医学によって完治し生きながらえることが可能になったこと。土や気候、植物についての分析が進んだことによって、得られる食料が増え、貯蔵の技術も向上し、私たちは安定的に食事をすることができるようになったこと。現代社会だからこその苦悩や地域の差、社会問題もあり、すべて完璧に整っているわけではありませんが、現代日本において一般的には基本的な生存の安寧が、千年2千年前よりは各段に向上しているといえます。

しかし、その一方で、進んだ科学は素朴に目に見える形や理解できることばかりではありません。車輪の発明などは、それを思いつかなかった人たちであっても、担いで持ち上げるより転がした方が楽だな、ということが目で見てわかるでしょう。

でも、目の前に白い粉があった時、熱を下げるものなのか、お腹を壊してしまうものなのか、熱を下げるけれど副作用として少しお腹の調子が悪くなるものなのか、私たちは、それを個人で理解したり証明したりすることは、多くの人ができないことです。お医者さんから処方箋をもらい、製薬会社が作ったものを薬剤師さんに処方してもらう。それら一連のことを暗黙の了解として、私たちは科学の成果である薬を受け取って治療をしま

す。では、これらのことをいちいちすべて自分で確認しようとしていると身がもたない。

それで言えば、私たちはふだん理性的に物事をとらえ、判断し、行動していると思っていても、「大丈夫（だろう）」という思い込みの上で暮らしているとも言えます。思い込み、と書くと少し語弊があるかもしれません。いきなり妄信をしているのではなく、その「大丈夫」に至るまで、私たちは生まれた時からその社会に身を置いて見たり体験して学び、教育を受けて、私たちが共有している社会的なインフラや文化、その根本たる科学的思考は信に足ることであることを多くの人と理解・確認しあい、共有していることを身に着けているのです。科学はいまだ発展途上であり、解明されていないこともあるし、時には定説となっていたことが覆されもする、「正しいから信じられる」ということでもありません。本書の第1章では「一般の人々が科学を信頼すべき理由は（中略）科学が集団的な営みであり、社会的な活動であるという事実にこそある」とナオミ・オレスケスの言葉を引いています。

ですから、科学に対して疑いの目をもつ、ということは健全なことでもあります。よく、フェイクニュースなどについて「自分で考えることが大事だ」と言われたりします。「科学を否定する人たち」は、きっかけは真面目な疑念であったり、不安を覚えたことを調べようとした結果、誤った知識のフィルターバブルに陥ったり、入り口はそれぞれですが、むしろ、自分でよく考える人たちであることも多く、それは決して軽んじてよいものではありません。

本書では、科学を否定する人たちの社会的分析を中心として、何度も「私たちにできることは?」という節が付されます。

人がその個人において、たとえばネッシーを信じているだとか、ファンタジーを熱心に支持していたり、科学では説明しきることのない信仰を持つことは、それぞれ尊重されるべき文化です。

しかし、科学を「集団的な営みであり、社会的な活動」として広く社会基盤をともにし、その上に安寧を築いている以上、私たちは、科学に対して一定の共通理解を持ち続ける（疑義はなくすのではなく、健全な検証をともなうものとして）ことを、隣人たちと共有する努力をし続ける必要があります。そのことを本書は真摯に提案してくれます。

『ジーザス・イン・ディズニーランド』

近代化、科学を基盤とする社会の伸張によって、宗教への帰属が減少してきているのは、キリスト教だけでなく、多くの国・宗教でも起きています。ただ、私たちが人としての苦悩を背負いながら生きていく上でスピリチュアルな悩みや問題はなくなったわけではなく、そうしたものが、さまざまなものへスライドして

います。それは単純に信仰の対象が他のものへ移ることもありますが、本書においてはディズニーランドが消費主義のなかで宗教的営為を包括していくものとして、そうした「ディズニフィケーション」「ディズニーゼーション」（おおざっぱには両者ともディズニー化する社会を指しますが、二つは使い分けられた概念として論じられているため、詳細は本書にてご確認ください）された現代社会、その現代社会におけるキリスト教及びキリスト教的なスピリチュアリズムを論じています。

著者のデイヴィッド・ライアンは社会学者として、監視社会論を専門に、ポストモダン論の論者としても知られる研究者です。彼自身がキリスト教徒であり、この本ではそうした彼自身の信仰からくる思想も顔をのぞかせています。

この「ディズニー」は消費社会の象徴であり、実際に現在の世界で一番大きな影響力をもっているコンテンツ群です。本書のタイトルは、そのディズニーの本拠地であるカリフォルニアのディズニーランドで開催された伝道師・グレッグ・ローリー氏による宗教イベントに由来します。宗教的な主張とも矛盾が感じられ、奇妙にも思われる組み合わせですが、そうした「奇妙」と思ってしまう世俗化論（宗教社会学の語として、宗教が近代社会において衰退していくこと）に疑義を提示していきます。

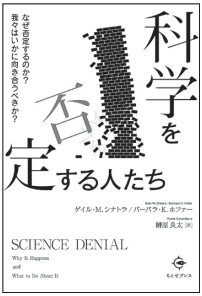
実際に、日本でも冒頭に書いたように、宗教に帰属して、信仰をベースに生活する人の人数は減っています。お墓じまいはその流れのひとつで、年間で数万、十数万件にものぼるそうです（厚労省による「改葬」の調査による）。

その一方で、クリスマスに教会へ訪れる人は（悲しいことに）多くありませんが、その関連市場は手堅く1兆円に近づく勢いがあり、年末年始の神社仏閣へのお参りは、約9千万人（警察庁の集計データ）だそうです。さまざまな「宗教に近接する行事や行為」は非常に一般的です。それでも、特に後者などは直接宗教施設へ訪れお賽銭を献金もしますが、新たに信仰の生活に入る人はまれです。そして、バレンタインデーに加え、近年ではハロウィンも、日本では（西洋的な、ぐらいのことが）キリスト教っぽい行事として定着してきています。そして、そのどちらでもディズニーのキャラクターたちはいきいきと活躍をしています。

本書において、著者も旧来的な帰属だけではなく、モダンな生活を送るなかにも宗教心はあると、宗教社会学の枠組みを丁寧に論じながら喝破します。そこで、そういう何でもありなんですよ、で投げ出すのではなく、ライアンは「信仰の未来」を、予言するのではなく、自身の信仰心をのぞかせながら、自身に、そして私たちにできることとその希望を語ります。

私たちは科学が支える社会の恩恵を享受し、そのことに感謝しながら、誤った

科学理解は避けつつ、しかし科学では語りえない信仰を維持し、伝道をしていく。また、頭の痛いことに、ディズニーとの隣接は文字通りかわいいものではありますが、それこそ社会や人権を脅かす「偽の科学」や同じ信仰から出発したはずの「科学を否定する信仰」にも立ち向かわなければなりません。使徒パウロの苦難ほどではありませんが、私たちは苦難を乗り越え、偽使徒たちから信仰を守り、科学を守らなければいけません。



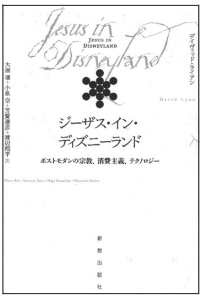
『科学を否定する人たち——なぜ否定するのか？我々はいかに向き合うべきか』

ゲイル・M. シナトラ、
バーバラ・K. ホファー：著
榊原良太：訳
ちとせプレス
2025 年
四六判
312 頁
3,080 円

『宗教の本質——人間にとって宗教とは何なのか』

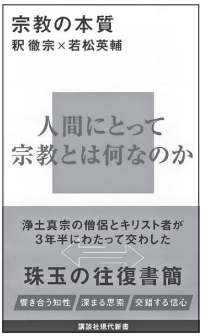
評論やエッセイなどで人気の僧侶とキリスト者の二人が、それぞれの信仰をベースに交わした往復書簡集です。ワンテーマではなく、いくつかのキーワードを元に応答することで、一見すると融通無碍に言葉が交わされているようにも思えますが、異なる信仰を持つふたりが意見を交わすことでその共通点と差異が、普遍の「宗教の本質」に迫る構成となっています。

科学や社会の在り方はこれからも進歩・変化します。私たちはその中で信仰を形ではなく、現実の拒否でもなく、本質を見極め、保ち続けなければなりません。



『ジーザス・イン・ディズニーランド』

デイヴィッド・ライアン：著
大畑凜、小泉空、芳賀達彦、
渡辺翔平：訳
新教出版社
2021 年
四六判
336 頁
3,850 円



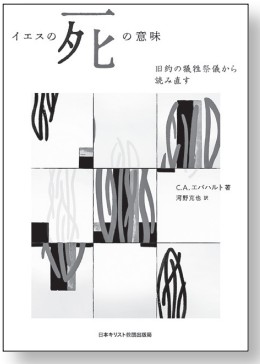
『宗教の本質——人間にとって宗教とは何なのか』

釈徹宗、若松英輔：著
講談社
2021 年
新書判
320 頁
1,210 円

†本・批評と紹介

犠牲祭儀の本質に近づくと見えてくるイエスの死の意義

〈評者〉**浅野淳博**



イエスの死の意味
旧約の犠牲祭儀から読み直す
C・A・エバハルト著
河野克也訳

キリスト教界内外からいわゆる「贖罪論」の問題が指摘されて久しい。高橋哲哉氏が『犠牲のシステム』（二〇一二年）において著しく問題のある仕方でキリスト教贖罪論を批判したにもかかわらず、日本のキリスト教研究者らはほんの一部の例外を除いてダンマリを決め込んでいる。教会は贖罪論への違和感を頭の片隅にくすぶらせながら、あるいはまったく意にかけない様子で、「神が罪深い私たちの代理としてイエスを殺して下さり感謝する」あるいはそれに準ずるお題目を繰り返している。そのような状況にあって、エバハルト著『イエスの死の意味　旧約の犠牲祭儀から読み直す』が発刊された意義は非常に大きい。

じつに著者は導入部分において、贖罪論の一般的な問題を、神がその子を殺すことで満足する加虐性と代理による問題解決の倫理性であると指摘し、それらを回避する苦し紛れのキリスト教的応答が自己救済を提唱しているとする（一〇～一三頁）。本著は大きく分けて二つの章から構成されている。第一章は「ヘブライ語聖書を読み直す」と題して、旧約聖書とくにレビ記1～7章に記される儀礼祭儀を解説する。この第一章での議論を根拠として、著者は第二章「イエスの犠牲」においてイエスの生き様と死に様がいかなる仕方で救済的に意義があると教えられているかを明らかにする。

第一章では犠牲の解釈史を概観し（一七～三〇頁）、さらに聖所と神殿とがいかに神と人との出逢いの場所としてデザインされているかを詳述した後（三〇～五四頁）、五つの犠牲祭儀がいかなる仕方と意図で行われたかを詳述する（五四～八七頁）。すなわち、焼かれる献げ物、穀物の献げ物、幸福の犠牲、浄罪の献げ物、そして罪責の献げ物

である。著者は旧約聖書の犠牲祭儀を「多義的な統一体」（八二頁）と表現し、その特徴を以下のように要約する。分離された人が神に接近すること、殺すことに焦点が置かれていないこと、血（の振りかけ）の重要性が限定的であること、植物をも含む多様な素材が用いられること、敬意と関係性を保証するための食事が文脈にあることである。

第二章は旧約聖書における犠牲祭儀を前提として新約聖書における犠牲祭儀への言及の真意を探究する（九〇～一〇六頁）。したがって、イエスが犠牲であるという言説（エフェ5・1～2）は神の受容を象徴する穀物の献げ物を指しうるし、イエスの血への言及（一ヨハ1・7）は代理死でなくイエスの命の神聖を強調しているし、聖餐における契約の血（マコ14・24）はやはり代理死でなくキリスト者の聖別に焦点がある。さらにヘブライ書における血と犠牲への頻繁な言及はより優れたキリスト論的祭儀を提供するためであり、キリストが贖いの場（ロマ3・25）であるとは血の中の命（レビ17・14）が罪の浄めを可能にすることを教えている。

読者は、旧約聖書への深い理解に立ってイエスの死の意義を探究する著者の明快な議論をとおして、神の加虐性と代理死の倫理性という問題を内包する一般の贖罪理解を考え直す貴重な機会を得るだろう。最後になるが、この重要な著書を明確な日本語にして提供してくださった河野克也氏に感謝をしつつ書評を閉じる。

（あさの・あつひろ＝関西学院大学教授）

（A5判・一六〇頁・定価三三〇〇円、日本キリスト教団出版局）

聖書通読31 神の救いをたどる旅

石田 学

旧約聖書の初めから新約聖書の終わりまで、聖書全体を31日で概観する画期的な1冊。御言葉、ショートメッセージ、祈りで1日分。毎日読んで、聖書全体から福音を味わおう。贈り物にも最適。

四六判 並製・144頁・定価1760円

みんなの説教入門

小泉 健

聖書の読み方から、説教原稿の書き方、語り方まで、説教準備の全プロセスを丁寧に解説。牧師も信徒も、「みんな」のための説教ガイド。「説教者の霊性」を説き明かす点にも注目！

A5判 並製・152頁・定価1980円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 FAX 03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp《価格10%税込》
https://bp-uccj.jp

†本・批評と紹介

専門研究への刺激を与えてくれる素材に満ちた論文集

〈評者〉宍戸基男

日本カルヴァン学会学会誌
カルヴァン研究
第2号
久米あつみ先生献呈論文集
日本カルヴァン学会編

本書の内容は、学術講演が3本（「カルヴァンの義認論の再評価……吉田隆、「礼拝の構成要素としての詩篇、J・カルヴァンの場合」……菊地純子、「カルヴァンの聖書解釈：古代から中世を経て」……野村信）、と研究発表2本（「カルヴァンの妻、イドレット・ド・ビュール」……木村あすか、「晩年のポール・リクールにおける哲学的不可知論」……山田智正）、最後に「H・オーバーマン著『二つの宗教改革』を巡って　訳者、編集者たちによる自由な語り合い……発表者　金子晴勇、竹原創一、田上雅徳、野村信によるシンポジウム」、A5判、104頁の比較的小型の学術書であるが内容はどれも充実しており、扱われている分野も多岐にわたっている。自分の興味や専門研究への刺激を与えてくれる素材に満ちた好論文集となっている。

「日本カルヴァン学会」発足の経緯については本書1ページに野村先生によって記されている通り、組織の変遷もありアジアの国々の研究者たちとの交流を通じて、広くカルヴァンのプロテスタント信仰や教会に対する影響だけでなく、政治学や政治思想史、さらには経済史的な影響力の研究につながるような、カルヴァンの影響はどうであったのかといった問題も、この学会で論議されるようになっている（本号の田上雅徳氏の発表参照）。これらの傾向は歓迎すべきことであると同時に、公平に見てカルヴァンの大きな貢献はプロテスタンティズムの構築にあったことは否定できない。教会形成については、プロテスタンティズムの第二世代としていかにカトリック教会に対して自らの立場を構築するか、また再洗礼派などの対応にいかに腐心したか。これらはカルヴァン業績の主要な柱としていつも

捉えていることは言うまでもないであろう。

今回の諸論文の中で、筆者の注目を引いたのは、「礼拝の構成要素としての詩篇、J・カルヴァンの場合」（菊地純子）。日本では詩篇を個人的信仰の養いという点からは受け止められているが、神の民イスラエルが神礼拝の重要な要素として、詩篇を歌うことをしていた歴史的事実を裏付けながら、これを回復しようとしたカルヴァンの業績の歴史的検証を踏まえ、それを日本の諸教会に根付かせようとする著者の冷静さと熱意が伝わってくる。また野村論文の第一論文「カルヴァンの聖書解釈」およびシンポジウムでの発表で、言及されている「聖書のみ」が日本の教会では「教理のみ」になり、人間の体でいえば骨格のみで、これが行き過ぎて過剰防衛となり、身動きが取れなくなって肉の成長が抑えられている。教理体系による枠がわたしたちを抑え込んで自らの首をしめ窒息しているというのが日本の現代の姿である（p92）。その解決としてのカルヴァン自身の聖書解釈の方法の提示は聞くべき論説である。

本号は長く学会を指導してこられた久米あつみ先生への献呈となっているが、筆者が1987年カルヴァンの生誕地ノワイヨンの記念館を訪ねた折、『綱要』の諸外国の訳の中に、日本語訳中山昌樹訳、渡辺信夫訳、そして久米あつみ訳があった。久米訳は1986年に出版されている。

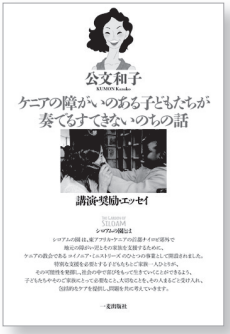
（ししど・もとお＝日本基督教団日本橋教会牧師）

（A5判・一〇四頁・定価一六五〇円・ヨベル）

ケニアの障がいのある子どもたちが奏でるすてきないのちの話

講演・奨励・エッセイ

公文和子＊著
KUMON Kazuko



NHK プロフェッショナル
仕事の流儀
小児科医 公文和子
出演〔2025/03/20〕で話題

東アフリカ・ケニアで障がい児とその家族を支援するために療育施設「シロアムの園」を開設

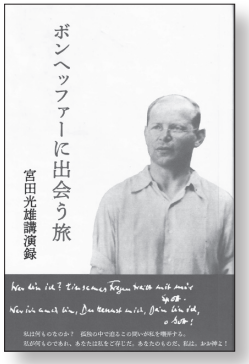
A5判・並製
定価 1,100［本体 1,000＋税］円
ISBN 9784863251724

株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢３丁目 4-10
TEL（011）578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

†本・批評と紹介

さあ、書を持ち、旅に出よう！

〈評者〉小海　基



ボンヘッファーに出会う旅
宮田光雄講演録
宮田光雄著

本書は、三九歳でディートリヒ・ボンヘッファーが強制絶滅収容所で絞首刑となって80年となる本年に、新全集版『倫理』（新教出版社）の名邦訳を四人のお弟子さん（全員が宮田聖書研究会出身者や元ゼミ・メンバー）と共に出された九七歳の宮田光雄先生の、おそらくは最後の著作となる（あくまで非公式声明。九月に行われた日本ボンヘッファー研究会全国研修会で内容深いご挨拶をいただいた感じでは、まだまだ出されると期待させるが…）そうである。七二頁の小さな美しい書物であるが、出版したのが、岩波書店、新教出版社といった大手ではなく、決して大きくない仙台のキリスト教書店である「エッサイの木」というのもいかにも先生らしい。またこの本を企画した大越美穂社長のセンスと英断にも敬意を表したい。

「活字離れ」と言われる風潮が私たち日本のキリスト教界にも広がっている。しかし真実に繰り返し読まれる出会いというものがある。書物は単なる「情報」源ではない。一人の人の全人生を「旅」しながら、繰り返し味わうべきものである。そうした書物との幸せな出会いを本書から改めて知らされる。そうした「人生の一冊」と出会ってほしいものである。本書に収められている写真の中で、何度も読み込まれて装丁もボロボロになった独語版『倫理』や『抵抗と信従』（獄中書簡集）がとりわけ印象的である。「私たちは、生涯かけて長い道程を歩いていかねばなりません。それは、本来、さまざまな出合いの旅なのです。素晴らしい友人、あるいは素晴らしい書物との出合いによって、これまでとは違った自分に変えられ、新しい世界に開かれていく旅でもあります。…」と語り出される本書の前半は、そもそも「エッサイの木」の開店記念講演であった。

宮田先生の書物の出会い方は、活字を一人で読むだけに留まらないで、若い仲間と分かち合い、討論し合い、更には書物を片手にボンヘッファー終焉の地であるフロッセンビュルク強制収容所跡、ボンにある友人のベートゲ宅、ボンヘッファーが収監された今は取り壊されてしまったベルリンのテーゲルの刑務所の九二号室（ここまで入った日本人研究者は他にいない）…と、本書と共に、まるで私たちも著者と共に旅しているかのようだ。

実際に旅し、ボンヘッファー直接に出会った人たちと話してきたからこそ知らされる意外な姿にも出会えるのも魅力。「ボンヘッファーの声には『人びとを魅惑するような響き渡る調子』がなかった」（一七頁）。弁舌家どころか、「冷たさ」、「よそよそしさ」を感じる人もいた位だったというのだ。一方で当時「悪魔のゲストハウス」と呼ばれたテーゲル刑務所の監視人さえも、「この人のような…囚人を、まだ見たことがありませんよ」と感嘆させた（二七頁）「厳粛な真実さ」の姿。

本書後半は私も参加した二〇〇七年年のボンヘッファー生誕百年記念講演。年齢差では圧倒的に若い婚約者マリーアとディートリヒが〔特にリルケの詩等をめぐって〕いかに対等に対話していたか、二人の『往復書簡』の終わりあたりでは、むしろ「二人の立場は逆転していくかに見える」と、先生は読み解かれていく（五一～五五頁）。若い人たちと読書会を続けてきたからこその発見だと感嘆する。

（こかい・もとい＝日本基督教団荻窪教会牧師、日本ボンヘッファー研究会代表）

（B6判・七二頁・定価一一〇〇円・CBS仙台）

ボンヘッファーに出会う旅

宮田光雄講演録

60年に及ぶ著者のボンヘッファー研究の道程を回顧し、ボンヘッファーの今日的な意義に説き及ぶ。また付論「ポリフォニーとしての生――ボンヘッファーにおける愛の構造」と初公開の写真資料も収録。

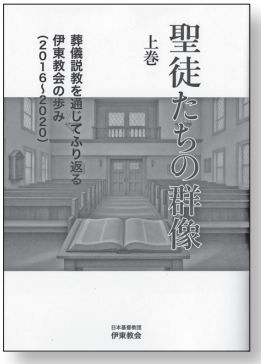
定価 1,100円（税込）

エッサイの木
― 本と雑貨の店 ―
〒980-0012
仙台市青葉区錦町１丁目13-6
エマオビル1階
022-223-2736
shop@essainoki.jp
発行：（株）CBS 仙台

†本・批評と紹介

教会史としての葬儀説教集

〈評者〉山口陽一



聖徒たちの群像　上
葬儀説教を通じてふり返る
伊東教会の歩み
（2016～2020）
日本基督教団伊東教会編

本書は伊東教会の葬儀説教集です。同教会は日本同盟基督協会として設立され、日本基督教団にあって旧同盟協会の交わり・「マケドニア会」のメンバーでもあります。ドイツ留学後に就任した上田彰牧師の説教を中心に、上下巻に四十人前後の葬儀説教と関連の説教が収録されています。本書のきわだった特徴は、葬儀説教集のかたちをとった「伊東教会一二〇年史」であるということです。前回の百周年記念誌発刊以降の召天者や教会の歴史をすべてカバーしているわけではありませんが、読後感はまさに教会一二〇年史でした。事実教会役員会では、前回とはひと味違う形で教会の歩みを記録する意図で葬儀説教出版を企画したということです。上巻のあとがきには端的に、「葬儀の記録を教会の記録として編み直す試み」と記されています。

正直なところ、知らない方々の葬儀説教を興味をもって読めるだろうかと思いつつページをめくり始めました。ところが、説教から未知の人の信仰と人生が目に浮かぶのです。模範的な信仰者だけを選んでいるわけではありません。著名人として日野原重明やキリスト教功労者（中島省吾・相沢良一）の家族もおられますが、美化せずに伊東教会とこれに連なる「無名の人」として描いている感があります。牧師の妻や子、長年の信徒、牧師の「戦友」もいれば、縁を辿って葬儀を頼まれた人もいます。信徒家庭に生まれ、教会に親しみつつ信者にならなかった人を百人隊長の信仰に重ねながら語り、牧師と教会の実力不足を悔やむ説教が心に留まりました。いや、すべての説教において描き出されるその人の生きざまと説教者の愛のまなざしに心惹かれました。葬儀に定番のテキストでなく、その人の生涯に交差する聖書箇所が選ばれ、聖書からその人の生と死が鮮や

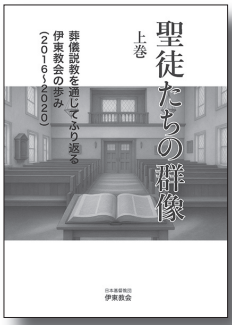
かに浮かび上がり、葬儀において深まる聖書の釈義が残るのです。内村鑑三が日本人のために書いた『キリスト教問答』が「来世」から始まるとの慧眼、「短いが、それでいて力強い」「仲立ち」など各説教における中心思想の明確さ、「私ども自身が希望する力によって前進しているのではなく、イエス様が希望する力を与えながら私どもに近づいてきてくださる」といった純化された言葉が、看取りの牧会の中で紡ぎ出されます。

一つの驚きは、葬儀説教を通じて伊東教会という神の家族が立ち現れ、創立以来の教会の歴史が反復しつつ成長する姿が見えて来ることです。通称「耶蘇通り」の住人をはじめ伊東教会の精神を体現する人たちが、教会と福祉活動において地元に息づく様子が随所に見て取れました。

日本伝道の課題が「日本のキリスト教化」と「キリスト教の日本化」であるなら、本書を通じて探求したいのは「キリスト教の日本化」である、と著者は言います。キリスト教葬儀がめざすのは「死と生が最終的には個人―故人や遺族―のものではなく、神のものであるということを明らかにすることである」とも語ります。このような理念に基づく説教は、経験を重ねてその技量を磨くことで生まれたように思われます。本書は伊東教会にとって大切な記念であるだけでなく、神の栄光のための日本宣教を志すすべての人にぜひ読んでいただきたいものです。

（やまぐち・よういち＝東京基督教大学特別教授・日本同盟基督教団市川福音キリスト教会代務者）

（A5判・二六〇頁・定価二五〇〇円・日本基督教団伊東教会）



聖徒たちの群像（上）好評発売中

聖徒たちの群像（下）11月発売開始

上下巻共にA5判、250ページ前後　2500円（税込み）

お近くのキリスト教書店などでお求めになれます。

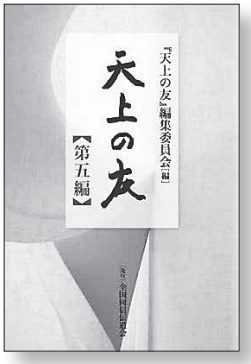
発行： 日本基督教団
伊東教会
https://itokyokai.jimdofree.com/

販売：（有）静岡聖文舎
〒420-0866 静岡県
静岡市葵区西草深町 20-26
TEL.054-260-6644

†本・批評と紹介

剛毅さと豊饒さに溢れた伝道者列伝

〈評者〉山北宣久



天上の友　第五編

全国同信伝道会編

全国同信伝道会が編集、発行した『天上の友』は第五編を数え、今回は十一年ぶりの出版となる。「日本の伝道を担い、いまは『天上の友』となった一三四名の先人たちの働きを思い起こす。」と帯に記されているごとくだ。

「イエスは、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた」（マタイ九・三五、四・二三）。この主のなされた救いの業に応答し、教会・伝道所をはじめ学校や福祉等の関係団体、施設で宣教に従事した方々の尊い働きが今なお「世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかり保」っている（フィリピ二・一五～一六）。

お一人について一頁分、わずか六〇〇字でまとめるという不可能を可能にした各執筆者と六名の編集委員諸氏の労作を多とし、感謝と敬意を表してやまない。

『天上の友』の各々の略伝、足跡、人生のハイライトとともに、その方のモットー、人柄についてのコメントも散在する。「人を育て続けた生涯であった」「すべて神様の計画、御業なんだよ」「誰にでも向けられる屈託のない笑顔は、教会に来る者の疲れを癒し、重荷を軽くした」「慙愧に耐えない老後を過ごした。神に謝ってのみの生活であった。悔いるのは、本人たちに謝らなかったことである」「最後の一人になっても切り捨てない」「じゅみょうとは神から授かった命、授命です」「教育とは教えることや教えられることではなく、一つの出会いであり、チャンスである」「神にすべてを委ね、恩寵のもと笑顔で最期を迎えることができれば他は何もいらない」等々。「彼は死んだが、信仰によって今もなお語っている」（ヘブル一一・四、口語訳）との御言葉の証言満載でもある。

会衆主義教会の伝統と精神を継承し、「キリストにある自由を生きる群れ」の多様性 Unity in Variety を生かして余りある豊潤さに励まされる。本書の編集委員長を担った上林順一郎氏の著書『「引き算」で生きてみませんか』の中で、「アメリカ人宣教師が『友』という漢字を見たとき、人が十字架を担いでいる姿に見えた」というエピソードを紹介していた。『天上の友』に登場した先達は、十字架を共に担いで歩んだ面々なのだと改めて想った。

天上のみ賑わい、地上の陣営が手薄なるを憂うのだが、次世代に向けて導き、目標そして励ましを与える本書は、貴重な道しるべとしても用いられるであろう。

私は日本基督教団の「荒野の四〇年」と言われる時代に総会議長を務めさせていただいたが、その中で激しく対峙した方々の名を見出し、いささかの感慨を催した。「友となるには砲煙が必要」とニーチェは言ったが、大いに鍛えられ、覚醒させられた人々であった。「鉄は鉄をもって研磨する。人はその友によって研磨される」（箴言二七・一七）

そんな対岸にあるやに思える者に、拝読すべき重さ深さを有する『天上の友』の書評を委ねてくれた全国同信伝道会の包容力に崇敬と謝意を表する。教団の「友」でよかった。

（やまきた・のぶひさ＝日本基督教団田園調布教会牧師）

（四六判・一四八頁・定価一九八〇円・キリスト新聞社）

挑戦の記録

志をつなぐ
ちいろばのバトン30年
最後まで自分らしく暮らせる地域社会を目指して

近江ちいろば会◎編

基本理念に掲げた「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」を脈々と受け継ぎ、多くの事業を通して尊厳ある生き方を支えるまちづくりを模索してきた近江ちいろば会の歩みを、関係者の証言で振り返る。

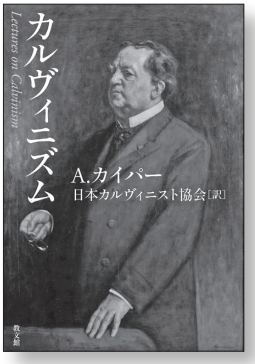
B5判・並製・100頁、定価1,430円（税込）

キリスト新聞社 since 1946
〒112-0014 東京都文京区関口1-44-4 7F
03-5579-2432　support@kirishin.com

†本・批評と紹介

キリスト教世界観を学ぶ古典的名著

〈評者〉岩田三枝子



カルヴィニズム
A・カイパー著
日本カルヴィニスト協会訳

アブラハム・カイパーの『カルヴィニズム』を初めて読んだのは、大学生の頃でした。東京基督教大学で稲垣久和教授の講義を通してカイパーのキリスト教世界観に出会い、その世界をもっと知りたいと思った私に、稲垣教授が勧めてくださったのが本書でした。後に母校で「キリスト教世界観」の授業を担当することになった際も、学生に紹介したい一冊として「おすすめ書リスト」に載せていましたが、長らく絶版だったことが残念でした。今回、日本カルヴィニスト協会の新訳として本書が刊行され、再び手に取ることができたのは喜ばしいことです。翻訳に携わられた方々のご労と情熱に、心より感謝申し上げます。

本書は、キリスト教世界観の父とも言えるアブラハム・カイパー（一八三七―一九二〇）が、一八九八年にアメリカのプリンストン神学校で行った「ストーン講義」の記録です。オランダの牧師家庭に生まれたカイパーは、神学博士号取得後、牧師として働き始めましたが、その活動は牧会にとどまらず、キリスト教新聞の編集長、下院議員、アムステルダム自由大学の創設、そしてオランダの総理大臣も務めています。「人間が存在している領域で、キリストが『私のものだ！』と宣言しない領域は一インチ四方たりともない！」というカイパーの言葉は特に有名です。神の創造された広く深い世界の隅々にまで神の主権を認めていたカイパーの情熱が、この『カルヴィニズム』にはあふれています。

本書は六つの講義から構成されます。(1)世界観としてのカルヴィニズム、(2)カルヴィニズムと宗教、(3)カルヴィニズムと政治、(4)カルヴィニズムと学問、(5)カルヴィニズムと芸術、(6)カルヴィニズムと将来。カイパーは全体を通し

て、カルヴィニズムが宗教の一部ではなく、世界全体を意味づける包括的な世界観であることを説きます。あらゆる領域において神の絶対的主権があること、社会の各領域が固有の権威と秩序を持つこと、そして科学や芸術を含むあらゆる分野が神の共通恩恵として尊ばれるべきことを語ります。カイパーはこうも述べています。「カルヴィニズムは神の御前において人間を神の像に似たものであるがゆえに尊ぶばかりか、世界をも神の被造物として尊び、（中略）世界からの修道院的逃避に代わって今やこの世界の中で生のあらゆる立場において神に仕える」（四九―五〇頁）。

一方で、現代の読者としてどきりとさせられる表現もあります。日本に言及する際、「狡猾な『黄色人種』がいかなる災いをもたらすかわからない」（二九一頁）との記述があります。注釈によれば、これは幕末からまだ四〇年足らずの日清戦争勃発の直後という時代背景を踏まえる必要があるとされています。カイパーも時代の文脈に生きた人物であったことを思うとき、私たち自身もまた今日という時代の制約の中に生きているという、謙虚な自覚を促されます。

カイパーの講義からおよそ一三〇年が経ちました。本書は、信仰が単なる宗教的営みにとどまらず、政治・社会・文化といった公共的領域においてもキリスト者がどのように生きるべきかを示す指針として、今を生きる私たちにも問いを投げかけてくれるものです。

（いわた・みえこ＝東京基督教大学教授）

（四六判・三〇〇頁・定価二八六〇円・教文館）

ヨベルの新刊案内

金子晴勇 ヨーロッパ思想史家

「共生」の神秘［第3回配本］

キリスト教思想史の例話集 III

キリストとの共生として営まれる生活形態としての信仰の歴史！キリスト教の奥行きを伝える。

第三弾！ 新書判美装・二六四頁・一五四〇円

I『物語集』［既刊］／II『命題集』［既刊］

III『「共生」の神秘』［新刊］／IV『愛のかたち』［次回］

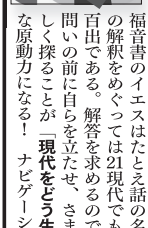
V『試練の物語』／VI『霊性の輝き』

新書判・平均二〇四頁・各巻本体一五四〇円

本多峰子

今、あなたはどう生きるか

イエスの語るたとえ



新書判・一九六頁・一五四〇円

「答えではなく、問い」である至福。福音書のイエスはたとえ話の名手であったが、その解釈をめぐっては21現代でも研究者の間で議論百出である。解答を求めるのではなく、イエスの問いの前に自らを立たせ、さまざまな可能性を愉しく探ることが「現代をどう生きるのか」の大きな原動力になる！ ナビゲーションとして最適。

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈（税込）

†本・批評と紹介

一つの家族史から見る、近代日本のキリスト教受容

〈評者〉**遠藤勝信**

あしたは必ず来る
明治から現代までのファミリーヒストリーを辿りつつ
湊　晶子著

本書は、著者自身の家系を縦軸に据え、近代日本におけるキリスト教受容の歩みを描いている。

第一章では、幕末に来日した宣教師たち（著者の家系に関わったのはJ・H・バラとE・R・ミロル）と、彼らを通して信仰を受け入れた沓掛家（著者はその五代目）の人々の姿が記録される。著者の信仰の源流は、一八七六年に弘子と友太郎（弘子の姉・みやの長男）が、同年設立の上田日本基督公会の初穂として受洗したことに始まる。弘子はのちに日本最初期の女性伝道者（バイブル・ウーマン）となり、友太郎も上田教会で執事、後に長老を務めた。著者の祖母・日野忍は三十四歳で夫を天に送ったが、五人の子を立派に育て上げた。毎朝四時に起き、聖書を読み祈る生活を続けた祖母の敬虔な姿は、著者の信仰形成に大きな影響を与えたという。戦前・戦中・戦後の激動期を背景に、著者の両親もまた信仰を継承し、聖書に生きる姿勢を崩さなかったことが語られている。

第二章では、明治・大正・昭和を通じてキリスト者として歩んだ家族史が整理される。沓掛家を起点に、忍、恵美子、著者へと受洗の系譜が続き、特に女性たちが信仰を支え、生活の中に祈りを根づかせてきた姿が印象的である。本章では、弘子とその姉・みやの関係について、従来の研究（『文化論集』第34号、二〇〇九年）に誤りがあった点を、独自の調査に基づいて訂正しており（四〇―四一頁）、学術的な功績として注目される。

第三章では、九十二年の歩みを振り返る中で「書き残したいこと」として三つの観点が示される。すなわち、①女子大だからこそ成し得る教育の重要性、②人が揺るぎない生を得るために求められる人格形成の必要性（横軸のみな

らず、絶対者＝神との縦軸の構築）、③挫折や困難を越えて歩むための「積極的人生の秘訣」十五項目、である。

そのほか、三笠宮崇仁親王が東京女子大学の非常勤講師を務めた初年度（一九五五年四月）に助手を務めたこと、米国留学中に街角で演説していたM・L・キング牧師と会話し抱擁を交わしたこと、さらにハーバード時代にはH・ナウエン氏とすれ違った際に「Crushed grapes produce delicious wine（押しつぶされた葡萄は美味しいワインを生む）」との言葉を受け、それが著者の座右の銘となったことなど、一世紀近い歩みの中での貴重な出会いのエピソードも語られており、興味深い。

本書の魅力は、単なる自伝や家族史にとどまらず、信仰と歴史の交差点に立つ人々の証言を通して、日本におけるプロテスタントの歩みを体感させてくれる点にある。戦時下に憲兵隊に幾度も連行されながら、大学の建学の精神を守り抜いた石原謙学長の姿勢には、襟を正される思いがする。

結びに、歴史家としての著者は、初代教会の信徒たちが苛烈な迫害下にあっても「永遠のいのち」を信じ、「あしたは必ず来る」との希望を告白し、毅然として生き抜いたことを振り返る。九十余年を生きた者の実感に裏打ちされた「あしたは必ず来る」という言葉は、この信仰の系譜に繋がっている。本書は、一つの家族の物語を超えて、キリスト教信仰が困難な時代を越えさせる力であることを鮮やかに示す記念碑的作品である。

（えんどう・まさのぶ＝東京女子大学現代教養学部教授）

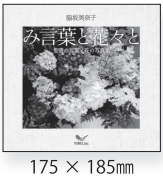
（A5判・一一二頁・定価一一〇〇円・教文館）

ヨベルの新刊案内

どうすれば赦せるようになるのか
52週の旅路
クリス＆ジェイミー・ベイリー　田尻潤子訳

「あの人を、どうしても赦せない」
そんな思いから、こんな苦しみから、
もう解放されたい……
その答えが、ここにあります。
四六判・二七二頁・一九八〇円

脇坂美奈子
聖書の言葉と花の写真集
み言葉と花々と
プレゼントに！



175 × 185㎜
144頁・1,100円

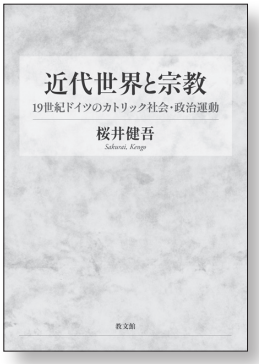
人生で出会い得たこのふたつの至福、それらをひとつに織り込むようにして毎週の礼拝堂に捧げられてきた生け花たち。
人生の四季を静かに生きてきた著者のたゆみない手のわざであり、その分身とも呼ぶべき花姿の数々を聖言とともに綴り合わせた写真集。

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851　FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈（税込）

†本・批評と紹介

近代ドイツ史研究に不可欠の書

〈評者〉**猪木武徳**



近代世界と宗教
19世紀ドイツのカトリック社会・政治運動
桜井健吾著

人間社会にとって、政治と宗教はどのような関係にあると考えればよいのか。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」（マタイ22・21）という答えが与えられていても、実際の政治の場でこの言葉がそのまま具体的に実践できるわけではない。政治も宗教も、人間のこころに潜む混乱に、ひとつの秩序を与える仕事という点で共通しているが、これらふたつが相互に排他的な分野として截然と分けられることはないからだ。

桜井健吾氏の大著『近代世界と宗教』は、この政治と宗教の関係という根本的な問いに向き合い、抽象論・観念論に陥ることなく、文献資料に即して具体的かつ丹念に論究した歴史研究である。氏の長年の研究の集大成とも言える。本書を粘り強く読み進めることによって、ヨーロッパ社会における政治権力と宗教権力の錯綜した緊張関係を深く学ぶことが出来る。

本書の内容を敢えて簡略に示すと次のようになろうか。まず一八〇三年の「世俗化」を、近代の社会と政治の構造転換に対応するカトリック世界の自己変革の出発点として位置付ける。一八四八年の革命の産物である「カトリック教徒大会」は、キリスト教界による民主的な多元社会を目指す運動へと宗派を超えて展開した。慈善事業の社会運動「カリタス」の再生と展開は、国の行政機構に組み込まれつつも有効な福祉運動へと発展。一九世紀初頭のツンフト解体の後に生まれた職人組合は「職業、家族、宗教」を合言葉として、産業社会への移行に対応しようとする先見性を持っていたと論ずる。

続いて、近代ドイツのカトリック社会運動として生まれたカトリック労働者同盟が、一八八〇年代に階級縦断的な

大衆運動として機能し始める過程を描く。だが宗教と政治双方に関わる二重の目的を持つこの組織は、経済面での自律性に特化した団体の運動を求めるようになる。その結果生まれるのがキリスト教労働組合である。この団体も労働者と労働組合の自律性をめぐり内部対立に直面し、社会主義勢力に対抗すべき力を生みだすことが出来なかった。

最後の二つの章では、宰相ビスマルク、カトリック弾圧に協力した自由主義者たち、そしてカトリック陣営の三者間の「文化闘争」の内実が論じられる。教皇レオ一三世が、ビスマルクと性急に妥協したにもかかわらず、教皇とドイツ・カトリック教徒とのつながりを強め、政治的利害を超えたところで世界の信徒と繋がり得る宗教・道徳上の地位を高めた、という指摘は興味深い。

こうした政治と宗教の対立と融和の問題が、時代の政治と経済状況を念頭に、清潔な文体で具体的かつ明快に論究する姿勢は見事と言うほかはない。近代に入って主流となった西欧キリスト教世界における「政教分離」の原則自体は、政治権力と宗教権力がお互いの侵入を避けるという意味では明快に見える。しかし分離が「いかなる事態を避けるためなのか」という点では日本と西欧は同じではなかった。自由の獲得をめぐる長い歴史をもつ西欧社会では、宗教が政治的関心を高めることによって、宗教の持つ本来的な力が弱まるのをいかに避けるのかも強く意識されてきたのだ。近代社会の難問を、具体的歴史事例をもって理解するための貴重な学術書の誕生を喜びたい。

（いのき・たけのり＝大阪大学名誉教授）

（A5判・四三六頁・定価五九四〇円・教文館）

サンタクロースのさいしょのさいしょ

聖ニコラウスのふしぎなちから

サンタクロースはトルコうまれ!?

鈴木郁子 作
吉田稔美 画

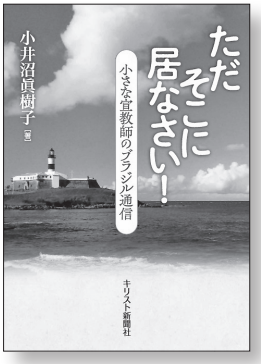
1800年ほど前にいまのトルコに生まれ、サンタクロースのもとになったキリスト教の聖人ニコラウス。いったいどんな不思議な力で人びとを助けたのでしょう。聖ニコラウスにまつわるさまざまな伝説をめぐる物語絵本。

B5変型判・32頁・1980円

玉川大学出版部
〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1
www.tamagawa-up.jp 〈価格税込〉

ブラジルと日本をつなぐ

〈評者〉 **大澤秀夫**



ただそこに居なさい！
小さな宣教師のブラジル通信
小井沼眞樹子著

小井沼眞樹子宣教師（マキコさん）が、ブラジルから支援者に書き送った「サンパウロ通信」「オリンダ通信」「SALVADOR」が纏められ、一冊の本になりました。ラテンアメリカと日本の教会をつなぎ、私たちに新しい視界と展望を与えてくれる、贈り物とも言うべき書物です。

マキコさんのブラジル宣教

「はじめに」では、誕生から宣教師となるまでが簡潔に記されます。若い日の教会生活、國光さんとの結婚、お母さんの介護、一九八六年から五年間のサンパウロ駐在生活、ブラジルで与えられた第二の回心、献身の決意と学び。

第一部「サンパウロ編」は、一九九六年から二〇〇六年までのサンパウロ福音教会での活動です。一〇年後、マキコさんは病を得た國光さんと共に帰国し、同年、國光さんは天に召されます。第一部の追記「小井沼國光の旅立ちに際して」を読む者は、國光さんの遺志を受けとめ、ブラジルに向かうマキコさんの深い思いを感じ取ることでしょう。

三年後、マキコさんは単身でブラジルに向かいます。第二部の「ノルデスチ編」は、ブラジル東北部の都市、オリンダとサルバドールにおける、二〇〇九年から二〇二一年までの活動報告です。

ただ、そこに居なさい

本書を纏めながら、マキコさんは「神の手によるジグソーパズル」というイメージを思い浮かべます。たくさんの人が自分たちの道のりに同伴し、支えてくれた。ひとつの出来事が欠けても、それは完成しない。自分たちの辿った宣教生活はそのようなものだった。じっと自分の場所に居て、待つ内に、神の手の内にある完成図が現れる。

書名の『ただそこに居なさい！』は、恩師の関田寛雄牧

師から贈られた言葉です。マキコさんの宣教活動を支え、その生き方を表す言葉になりました。

筆者が初めてマキコさんにお会いした頃、マキコさんは男の子たちを育てながら、お母さんの介護を担っていました。お母さんを天に送った翌年、國光さんがブラジル転勤になり、家族でサンパウロに移りました。それがマキコさんたちの生涯の転換点になりました。

街で出会った一人の貧しい女性を見過ごしにしてしまったことが心に突き刺さり、「お前は本当にキリスト信者なのか?」と問われる思いに迫られました。そこから、マキコさんはついに「ブラジルに行って苦しんでいる人々に仕えなさい」という招きを聴いたのです。自分がいるその場所に留まって、そこで示される課題を、身をもって引き受ける、それがマキコさんの生き方です。

ブラジルと日本をつなぐ

ラテンアメリカと日本の間にキリスト教信仰に根差した連帯関係をつくることを目指して一九九七年、マキコさんと國光さんはブラジル研修旅行を始めました。二〇二四年までに一一回、合計二四名がブラジルを訪問し、筆者は二〇〇八年に参加する機会を得ました。國光さんの遺志を受け継いで、「ラテンアメリカ・キリスト教ネット（ラキネット）」が発足したのは、二〇〇六年のことです。

マキコさんは二〇二二年に隠退し、現在サンパウロで暮らしています。二〇二五年秋には研修旅行で二名をブラジルに迎えました。マキコさんの旅はなお続いています。

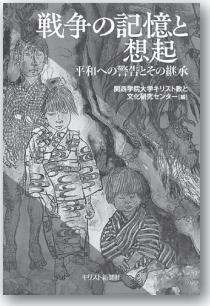
（おおさわ・ひでお＝日本基督教団隠退教師・鈴蘭幼稚園理事長）

戦後80年の今こそ

戦争の記憶と想起

平和への警告とその継承

関西学院大学
キリスト教と文化
研究センター◎編



戦争体験者の時代が終わろうとする今、薄れていく記憶をどのように保存し、想起していくのか。凄惨な記憶から生まれた声を未来へとつなげていくために何ができるのか。

国内外の多様な想起の現場からその知恵を探る８つの論考。

四六判・並製・168頁、定価1,650円（税込）

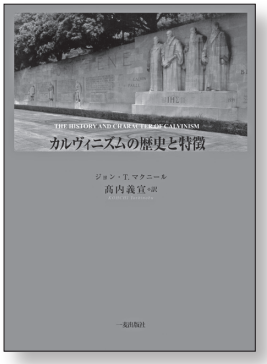
キリスト新聞社 since 1946
〒112-0014 東京都文京区関口1-44-4 7F
03-5579-2432 support@kirishin.com

（A５判・二八六頁・定価一九八〇円・キリスト新聞社）

†本・批評と紹介

改革派伝統とは何かを知る古典的名著

〈評者〉吉田　隆



カルヴィニズムの歴史と特徴
ジョン・T・マクニール著
高内義宣訳

著者のマクニールは、『キリスト教牧会の歴史』（吉田信夫訳、日本基督教団出版局、一九八七年）という書物以外に、日本ではあまり知られていないかもしれません。

しかし、マクニールの名は、特に英語圏のカルヴァン研究者の間では、一九六〇年の出版以来、現代英語訳の決定版として実に六五年以上も広く受け入れられてきた『キリスト教綱要』の産みの親として有名です。〝マクニール／バトルズ版〟として知られるこの英訳本は、単に翻訳の読みやすさのみならず、膨大な脚注によって、カルヴァンの神学思想を古代から宗教改革の時代に至るキリスト教諸文書をはじめギリシャ・ローマの古典的遺産の中に位置付けようとした、英語圏カルヴァン研究者たちの総力を結集した金字塔です。マクニールは、その編集者として最終責任を負った人物なのです。そのマクニールが、一般に「カルヴィニズム」とも呼ばれる改革派／長老派伝統の「歴史と特徴」を、その起源から現代に至るまで、さらにスイスから世界的広がりまで、おそらくは何巻にもわたるであろう内容をコンパクトに一冊にまとめた古典的名著が本書です。以下、簡単に内容をご紹介しましょう。

第一部は「フルドライヒ・ツヴィングリとドイツ語圏スイスにおける宗教改革」（通常〝フルドリッヒ〟と表記されますが、原著がHuldreichとなっています）。著者は適切にも改革派伝統の起源を、ツヴィングリを始めとするスイス宗教改革に見出します。第二部は「カルヴァンとジュネーブにおける宗教改革」。全体の三分の一を占めるこの部分は、言うまでもなく、著者が最も力を入れて記している箇所です。カルヴァンの生涯のみならず、その人格や歴史的重要性に至るまで、この部分だけでも本書を手元に置

く価値ある叙述です。第三部は「ヨーロッパと初期アメリカにおける改革派プロテスタント主義の広がり」。フランス・ネーデルランド・ドイツ・東ヨーロッパ・スコットランド・イングランド・アイルランド・アメリカにおける改革派伝統の広がりという、おそらく私たち日本の読者にとっては最も知識が欠落もしくは斑状になっている部分でしょう。第四部は「カルヴィニズムと現代の諸問題」。ここでは、単に狭い意味での教派伝統にとどまらない、思想や社会に広く影響を与えてきたまさに〝カルヴィニズム〟という名にふさわしい諸側面が、特にエキュメニカルな視点から描かれます。

この最後の箇所を読むと、マクニールの考える「カルヴィニズム」が、カルヴァンの神学伝統を忠実に継承しようとするいわゆる〝正統主義〟的伝統よりも、プロテスタント伝統のルター派でも再洗礼派でもない（いわば引き算で残った）伝統を包摂するような広い理解を持っていることがわかります。いずれにせよ、この伝統の複雑多岐にわたる歴史と特徴を一冊にまとめたような書物は、ほとんど類書が見当たりません。その意味で、カルヴァンとカルヴィニズム（改革派伝統）とは何かを知るための必須かつ標準的な書物と言うことができるでしょう。

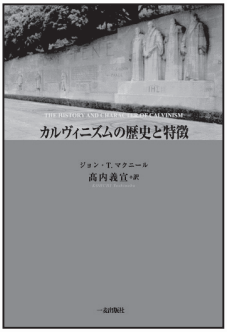
訳者の高内氏は、地方における多忙な伝道牧会の働きの傍らで訳業をコツコツと積み重ね、七〇歳の定年引退の年に成し遂げられました。その多くのご労苦に心からの敬意と感謝を捧げたいと思います。

（よしだ・たかし＝神戸改革派神学校校長）

（A5判・六六〇頁・定価一五一八〇円・一麦出版社）

カルヴィニズムの歴史と特徴

ジョン・T. マクニール
高内義宣＊訳



カルヴァンがいなければ近代の歴史は違っていた

カルヴィニズムが辿った歴史とその意味を文献と資料によって鮮やかに描き出す.

A5判・上製・函入
定価［本体 13,800＋税］円
ISBN978-4-86325-168-7

株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL（011）578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

既刊案内（2025年8月～2025年9月）

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
岩本遠億	ほんとうの自分に出会うとき ――ルカの福音書説教集３	新書	216	1,320	ヨベル	8／9
大貫隆	福音書の隠れた難所	四六	416	3,080	ヨベル	8／28
ヘンリ・ナウエン著 渡辺順子訳 英隆一朗解説	ナウエン・セレクション 新しい生き方 ――イエスについての七つの手紙	四六	160	2,200	日本キリスト教団出版局	8／20
C. A. エバハルト著 河野克也訳	イエスの死の意味 ――旧約の犠牲祭儀から読み直す	A5	160	3,300	日本キリスト教団出版局	8／20
奥田知志編	平和を受け継ぐ者に ――戦争証言・使命・祈り	四六	144	1,650	日本キリスト教団出版局	8／25
マーティン・レアード著 柳田洋夫訳	静寂の地へ ――キリスト教的観想の実践ガイド	四六	238	3,960	教文館	8／20
『天上の友』編集委員会編	天上の友　第五編	四六	148	1,980	キリスト新聞社	8／21
マシュー・ハケネス著 穐田信子訳	マルティン・ニーメラー ――ヒトラーに逆らった牧師	四六	400	4,400	新教出版社	8／25
宮平望	ユーモア実践 ――人生を楽しむ７法則	A5	150	1,650	新教出版社	8／25
日本基督教団 宣教研究所委員会編	宣教の未来Ⅱ	A5	208	1,650	日本キリスト教団出版局	9／3
小島誠志編 小林恵写真	まぶねのかたえに ――祈りのクリスマス・カレンダー	A5変	64	1,540	日本キリスト教団出版局	9／22
日本キリスト教団 出版局編	星に導かれて ――待降・降誕・公現	四六	112	1,540	日本キリスト教団出版局	9／25
竹田純郎	技術時代における宗教、キリスト教	A5	216	2,200	ヨベル	9／11
鈴村智久	現代において信仰はいかに可能か ――ヘーゲル宗教哲学の提示するもの	四六	328	2,200	ヨベル	9／23
ギュイヨン夫人著 大須賀沙織訳	雅歌註解 ――神と魂との霊的婚姻をめぐる神秘的解釈	四六	302	3,080	教文館	9／12
原敬子編著	ヒューマニズムということ ――街角のキリスト教人間学	四六	408	4,180	教文館	9／24
N. T. ライト著 本多峰子訳	いばらの冠と愛の炎 ――イエスの十字架の意味と聖霊の働き	四六	218	2,750	教文館	9／24
M. L. ベッカー著 加納和寛訳	総説キリスト教神学 ――21世紀の神学体系	A5	994	13,200	教文館	9／24
児玉麻里	世界音楽の旅 ――オルガニスト児玉麻里の教会巡行録	四六	422	2,090	キリスト新聞社	9／16
近江ちいろば会編	志をつなぐ ちいろばのバトン30年 ――最後まで自分らしく暮らせる地域社会を目指して	B5	130	1,430	キリスト新聞社	9／20
ジャン・カルヴァン著 堀江知己訳	イザヤ書註解Ⅱ ――11–27章	A5	616	8,470	新教出版社	9／18
ジョン・ミルバンク著 原田健二朗訳	神学と社会理論 ――世俗的理性を超えて	A5	700	9,350	新教出版社	9／25
日本聖書協会	旧約聖書詩篇 ――四訳対照（文語訳　口語訳　新共同訳　聖書協会共同訳）	A4変	422	3,960	日本聖書協会	9／23

書店名	郵便番号	住　所	電　話	ファックス	URL	メール	郵便振替
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用			02350-0-874
エッサイの木	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6　エマオ1F	022-223-2736	022-302-6678	https://essainoki.jp/	shop@essainoki.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新宿2-8-2　千葉クリスチャンセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス東京	169-0051	新宿区西早稲田2-3-18AVACOビル2F（通販専門）	03-3203-4137	03-3203-4186	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	112-0014	文京区関口1-44-4宗屋関口ビル日キ販内（外販専門）	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkihan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www7b.biglobe.ne.jp/~yokohama-cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	名古屋市昭和区丸屋町3-16 日本キリスト教団東海教会内	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.coocan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
バイブルハウス京都	606-0007	京都市左京区岩倉東五田町23 日本基督教団平安教会内（外販専門）	090-5138-7020	075-320-1844		kyoto-jbs@bible.or.jp	01010-2-594
バイブルハウス堺	591-8023	堺市北区中百舌鳥町2-87 チャペルこひつじ2F	072-255-4970	075-255-4971		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
大阪キリスト教書店	552-0003	大阪市港区磯路2-2-18 港ルーテル教会1F	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店（聖燈社）	591-8044	大阪府堺市北区中長尾町2丁1-18	072-254-2233	共用		sakaixx@outlook.jp	00970-0-172228
神戸キリスト教書店	650-0025	神戸市中央区相生町4-5-12 神戸駅前ATビル401	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkihan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/matsuyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市中央区大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花４丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は　日キ販販売部　TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2025年12月号

特集＝差別に抗するとは
——多様性の尊重か権力への抵抗か

寄稿者＝上野玲奈、平良愛香、麗梨ReNa、吉岡卓、孫裕久、新免貢

◆追悼 田川建三氏（辻学） ◆連載 人物・日本キリスト教史（戒能信生）／ぼやき牧師のさすらい説教録（富田正樹）／異端者の世界航海（福嶋揚）／証言としての旧約聖書（田島卓）／新約釈義ルカ福音書（山崎ランサム和彦）、他

A5判・定価660円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社　TEL：03-3260-6148
Email: sales@shinkyo-pb.com

編集室から

同業のよしみである週刊書評紙「図書新聞」（武久出版株式会社）が来年3月末で終刊するという。戦後の知的風景を支え、出版事業を介して時代の思考をつないできた営みが、また一つ姿を消す。

10月11日付掲載の社告には、「読者、著者、出版社、印刷と製本、書店と取次、図書館、広告と流通、販売などによって形成される、裾野の広い出版文化圏を架橋する『一條の橋となるために』」創刊されたという、1949年当時の志が記されている。

読者の関心が移ろえば、場は静かに消えていくしかない。政治が混迷を深め、歴史の教訓と学術的蓄積が軽んじられる昨今、批評や対話の灯を絶やさぬために何ができるか。著わす人、読む人、届ける人、広める人、それぞれが自分事として捉えなければならない。

文化は「なくなってから気づく」のではなく、「あるうちに守る」もの。後になって「惜しい」と嘆くのでは遅すぎる。

（松谷）

【お詫びと訂正】

前号「本のひろば」11月号に誤植がありました。

16ページ、下段5行目に「ベルギーのニューネン」とありますが、正しくは「オランダのニューネン」です。ここに訂正し、お詫びいたします。

今後このようなことがないよう、書籍版元の教文館ならびに「本のひろば」編集委員一同、校正の徹底に努めてまいります。これからもご愛顧いただけますと幸いです。

予告

本のひろば

2026年1月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）「あとで効く聖書」最相葉月
（書評）上田光正著『バルトによる説教論』、ヘンリ・ナウエン著『新しい生き方』、マシュー・ハケネス著『マルティン・ニーメラー』、ジャン・カルヴァン著『イザヤ書註解Ⅱ』、竹田純郎著『技術時代における宗教、キリスト教』、芹野与幸著『ヴォーリズの足跡に魅せられて』他

11月の新刊 ●価格表示は税込

活けるキリストの現実

近藤勝彦［著］ キリスト教神学講演・論文集

真の「現実」とは何か？「真理」とは何か？

「キリスト者の完全」「勝利者キリスト」「イエスの無罪性」「神の協力者」「救済論の位置と内容」「救済史観の成立」「『日本基督教団信仰告白』を神学する」など、多岐にわたる教義学的諸問題を論じた最新の論考。主著『キリスト教教義学』を理解するうえでも不可欠の書。

●A5判・228頁・定価3、300円

私とは何者か

柳田敏洋［著］ キリスト教の視点から

AIと人間はどこが違う？ 人間の人格（ペルソナ）とは何か？ 自己を深く知ると、生き方はどう変わる？ 評判の瞑想指導者による、神を信じる人とそうでない人のための、本来の〈私〉をめぐる入門的考察。

●四六判・150頁・定価1、430円

関連書籍のご紹介

ティム・ステッド 著 柳田敏洋／伊藤由里 訳

マインドフルネスとキリスト教の霊性

神のためにスペースをつくる

●四六判・248頁・本体2、200円

教文館創業140年 記念限定復刊！

ギリシア語新約聖書釈義事典［全巻セット縮刷版］

H・バルツ、G・シュナイダー［編］ 荒井 献、H・J・マルクス［監修］

新約聖書本文に現れる全ギリシア語語彙の文脈的・歴史的・神学的意味を解き明かす比類なき事典として、刊行以来多くの方々にご愛用いただいてきたロングセラーを小型化・軽量化。

●A5判・1788頁・定価69、300円

教文館 〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3561-5549（出版部直通）《呈・図書目録》
キリスト教の書籍やCD、グッズのご注文は〈e-shop 教文館〉http://shop-kyobunkwan.com/ まで！

本のひろば　第八一六号　二〇二五年一二月号
一九五七年七月一七日　第三種郵便物認可
二〇二五年一二月一日発行（毎月一回一日発行）

新教出版社　〒112-0014 東京都文京区関口 1-44-4　Tel: 03-3260-6148 / Fax: 03-3260-6198
HP：http://www.shinkyo-pb.com, email：eigyo@shinkyo-pb.com

ディートリヒ・ボンヘッファー

抵抗に生きた神学者

没後80年記念、最新の評伝

クリスティアーネ・ティーツ著／橋本祐樹訳

ボンヘッファー研究の新世代をリードしてきた著者が、反ナチ抵抗運動に殉じた生涯と思想を立体的かつ簡潔に描き出した評伝。近年の受容史も詳説し、ボンヘッファー入門としても最適。2024年の第3版が底本。　四六判・定価2640円

11月11日

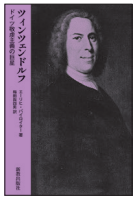
ツィンツェンドルフ

ドイツ敬虔主義の巨星

エーリヒ・バイロイター訳／梅田與四男訳

大貴族に生まれ、宮廷顧問官として活躍しつつ、モラヴィアの宗教難民を保護し、ヘルンフート兄弟団を設立、自らも世界各地へ伝道に赴き、数多くの賛美歌を作詞し、民衆の〈心の神学〉を唱道した生涯を紹介する。　四六変・定価2750円

11月11日



神学と社会理論

世俗的理性を超えて

ジョン・ミルバンク著／原田健二朗訳

ポスト・リベラル神学を主張する「ラディカル・オーソドキシー」の出発点。アングロカトリックの伝統に連なる断固たるキリスト教社会主義者の面目躍如たるものがあり、また現代思想との対論は極めて刺激的。2006年の第2版に基づく待望の邦訳　A5判・定価9350円

見知らぬ神の跡を辿って

新約聖書とギリシア・ローマ世界

川島重成著

神とは誰か、人間とは何ものか――。この根源的な問いをめぐり、西洋精神の二源流である聖書思想とギリシア・ローマ思想に耳を澄まし、両者の安易な調停ではなく、真摯かつ寛やかな対話を希求する18の講演。　四六判・定価3300円

宗教活動におけるマイクロアグレッション

大反響

キリスト教会の日常に潜む暴力と向き合う

四六判・定価 2970 円

サンダース&ヤーバー著／真下弥生訳　人種や性差などへの偏見の無反省な再演から意識的な嫌がらせまで、親密圏で生じる他者の属性への攻撃は教会も決して無縁でない。その構造を探り、対策を考える。

発行所　〒112-0014　東京都文京区関口一－四四－四　一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三－三二六〇－六五二〇　振替〇〇一七〇－五－一一六七九
発行人　金子和人　編集人　村上信児　印刷所　モリモト印刷㈱
発売所　日本キリスト教書販売株式会社　電話〇三－三二六〇－五六七〇
定価七八円（税抜七一円）（〒63円）
一年分一三〇〇円（送料共）

本のひろば.com